

近代西本願寺の別院本堂建築における「印度佛教式」意匠について

長谷川, 尚人

九州大学大学院、人間環境学府、空間システム専攻、建築史学研究室

<https://hdl.handle.net/2324/21679>

出版情報 : 2012-03-12

バージョン :

権利関係 :

近代西本願寺の別院本堂建築における「印度佛教式」意匠について

長谷川 尚人

1 緒言

西本願寺の築地別院は、近代日本における「印度佛教式」建築として¹、つとに著名な存在である。それは、伊東忠太と大谷光瑞の邂逅以来、明治末期には計画が頓挫しながらも、1934年、永年の宿望として実現したと云われてきた²。だが、近代に西本願寺が建立した別院には、様式混淆の建築意匠を有するものがこの他にも複数存在する³。それらは意匠も設計者も異なっており、共通するのは施主が西本願寺であることと、そのほとんどにおいて「印度佛教式」と呼称しうる特異な意匠がみられることのみである⁴。従来、これらの建築は、伊東と光瑞の個性に起因するものとして漠然と理解されてきたように思われる。これに対し、本研究では教団を主体とした観点から、これらの建築を時系列で包括的に捉える。伊東の提案が実現したのは伝道院と築地別院のみであり⁵、光瑞の在任前後も西本願寺は特異な建築を建立しているため⁶、両者の個性はある程度除外して考察できる。また、築地別院を含む一連の建築を、西本願寺を主体として捉えるうえで、明治末期以後の日本の大陸進出に追従した従軍布教（アジア開教）⁷、光瑞が企図した仏教文化の原点探索（大谷探検隊）⁸、ひいては西本願寺を大陸進出に利用しようとした日本の戦略をも⁹考慮する必要がある。こうした視座から、本研究では以下のような予見を検証することを、最大の課題とする。

倒幕にともなう宗門改の喪失と新政府の神仏分離の影響で、西本願寺は早急に膨大な門徒を確保するという難題に直面した¹⁰。このような状況のなかで、西本願寺は日清・日露戦争以後のアジアにおける権益の拡大を図る国家に追従し¹¹、アジア開教と大谷探検隊の展開というかたちで¹²、教団の活路を国内にとどまらずアジア諸地域をはじめとする国外にも模索した。その急激な近代化は教団内部での深刻な矛盾と軋轢、伝統教団に回帰しようとする逆方向の力を内包してもいた¹³。こうした文脈のうえで生じたのが、西本願寺の様式混淆の拠点施設であろう。その兆候はすでに大谷光尊の時代からみられるが¹⁴、日本の大陸進出とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、仏教の原点であるインドの石窟寺院や霊廟建築などの仏跡をモチーフとした建築様式は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、その有用性が次第に認められていった¹⁵。すなわち、西本願寺はこの建築様式を、迅速かつ膨大な門徒の獲得という一義的な目的のため、仏教を

彷彿させる教団の広告塔として顕示したと解釈できる¹⁶。

本稿では、先ず西本願寺のアジア開教と大谷探検隊の概要と時代背景を、文献史学上の先行研究に依拠するかたちで概観する¹⁷。西本願寺の社会状況を把握したうえで、本文では以下に示す建築の具体的事実を提示する¹⁸。近代に計画された西本願寺の特異な建築のうち、別院を中心とする拠点施設を管見の限り列挙すると、光尊寺・大連別院・函館別院・大泊別院・二楽荘・仙台別院・鎮西別院・伝道院・布哇別院・神戸別院・上海別院・光徳寺・築地別院となる。個別の建築に関する先行研究がある場合にはそれを取り上げるが、計画主体である西本願寺に着目し、本文では主に西本願寺の機関誌『教海一瀾』に依拠して計画の経緯を確認した後、個々の建築の意匠を写真や図面などの史料にもとづき観察する。建築と社会の両面を把握したうえで、それらを相互的に理解することによって、前述した解釈に至るものとする¹⁹。

2 西本願寺の二大活動と社会状況

2-1 西本願寺のアジア開教

アジア開教は、明治後期から終戦にかけて西本願寺が展開した大々の開教である。その概要を小島勝・三谷真澄・藤能成・新田光子・野世英水・赤松徹真『アジア開教史』と嵩満也「戦前の東・西本願寺のアジア開教」から確認する。

アジア地域のみならず、国外における西本願寺寺院の設置数を、日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦・満州事変・日中戦争を基準として、年代別に集計したものが下表である²⁰。表によれば、台湾・ハワイ・北米では日清戦争以後、樺太・朝鮮半島・中国東北部では日露戦争以後、中国では日中戦争以後、寺院が顕著に増加していることがわかる。

	1895-1903	1904-1909	1910-1918	1919-1930	1931-1936	1937-1945	不詳	計
シベリア	2	0	0	1	0	0	0	3
樺太	0	7	2	4	0	0	26	39
台湾	7	9	6	16	5	14	6	63
朝鮮半島	1	9	33	29	23	13	24	132
中国東北部	1	11	3	4	15	24	11	69
中国	1	3	1	1	1	35	5	47
「南洋」	1	0	0	2	5	7	0	15
計	13	39	45	57	49	93	72	368
ハワイ	21	14	7	2	2	0	4	50
北米	7	5	14	12	8	7	2	55
カナダ	0	1	0	4	5	0	11	21
合計	41	59	66	75	64	100	89	494

明治維新に始まる日本の近代化は、社会構造の根本的変化と、欧米の文化・思想・学問の流入による日本人の価値観の

変化を伴うものであったが、封建社会で特権的地位を与えられてきた西本願寺にとって、それは教団の存続に関わる事態でもあった²¹。こうした状況でアジア開教が展開された²²。

だが、結果として西本願寺のアジア開教は、早くから宗教的な意味での開教という意味合いを薄め、全体主義的な国家権力への追随へと変質していった²³。これは、江戸幕府による後ろ盾を失った西本願寺が教団の存在意義を近代日本の国益との関係のなかに見出そうとしたことに起因する²⁴。

2-2 西本願寺の大谷探検隊

大谷探検隊は、1902年から1914年までの間に、光瑞の主導で3次にわたり敢行された、中央アジア地域の調査探検活動を指すのが一般的である。本節ではその概要を、片山章雄「大谷探検隊の活動と大谷尊重（光明）・渡邊哲信」、白須浄真『大谷探検隊とその時代』をもとに確認する。

大谷探検隊の活動を略述すると、(1) 第1次隊5名が1902年8月にロンドンを出発、光瑞を含むインド隊を別にすると、新疆隊2名のうち渡邊哲信のみが1904年5月に帰国。(2) 第2次隊2名は1908年6月に北京を出発、モンゴル経由で新疆に赴き一帯の調査を終えた後、1909年11月にスリナガルでインド旅行中の光瑞一行と合流、各地調査の後に野村栄三郎のみ1910年2月に帰国。(3) インドから渡英した光瑞が派遣した第3次隊は、1910年8月ロンドンを橋端超と助手の2名で出発、新疆調査中に助手は病死し、辛亥革命直前の1911年5月に吉川小一郎が後続として日本を出発、敦煌で橋と吉川が合流し、その後は先ず橋が1912年6月に帰国し、残った吉川は1914年7月に帰国したとなる²⁵。

大谷探検隊が派遣された背後には、光瑞の非凡な発想と行動力がある²⁶一方、必ずしも光瑞の個性だけに出た行為では決してなかったとも云われる²⁷。大谷探検隊もまた、明治維新の廃仏毀釈に起因する西本願寺と新政府の対立といった時代の脈絡のなかで展開された活動と考えられる²⁸。

3 西本願寺の様式混淆の拠点施設

本章では、緒言に挙げた一連の建築を概観する。ただし、梗概という紙幅の都合上、主な史料と各小括を述べるまでとする。従って、内容については本文を参照のこととしたい。

3-1 光尊寺 1875 (明治8) 年

主に『光尊寺旧本堂調査報告書』に依拠した。明治初期、在来宗教の社寺建築に洋風意匠を取り入れた例は、全国的にも極めて珍しい²⁹。だが、光尊寺は1875年に竣工し、1888年に大改修されたと記録されている³⁰。西本願寺は大谷光尊の時代に、既にオーダーや色ガラスなどの本格的な洋風意匠を取り入れた³¹、特異な本堂建築を実現していたのである。

3-2 大連別院 1907 (明治40) 年 頓挫 伊東

主に『教海一瀾』と倉方俊輔「伊東忠太の西本願寺関連の計画について」に依拠した。伊東が設計した大連別院は、実

現こそしなかったが³²、本研究ではこれを明治末期に西本願寺が計画した「印度佛教式」別院として取り上げた。様式混淆の意匠には、葱花線のドームやアーチが見られる³³。大連別院の設計は、1906年7月下旬に伊東が西本願寺を訪れた際に依頼されたと云われるが³⁴、「印度佛教式」の別院という発想が、伊東と光瑞のいずれによるものかは定かでない。

3-3 函館別院 1908 (明治41) 年

主に『教海一瀾』と遠藤明久「西本願寺函館別院洋風本堂（明治41年）」、函館市中央図書館所蔵の写真史料に依拠した。函館別院は、正面に高さ59尺におよぶ「御拜」が聳え立ち³⁵、母屋の屋根以下を煉瓦造とした異彩を放つ建築であることを確認した。さらに、西洋を基調とした意匠の細部には、築地別院との類似性も指摘される³⁶表現が看取できた。函館では明治期を通して煉瓦造不燃建築が徐々に浸透していたが³⁷、そのような意匠・構造が、在来仏教の別院本堂に導入されたという事象が特異であることには変わりない。

3-4 大泊別院 1908 (明治41) 年 越本

主に『教海一瀾』と『龍谷週報』に依拠した。後述の二楽荘・伝道院などの設計に関与したとされる³⁸鶴飼長三郎が、それ以前にも西本願寺の技師として大泊別院を設計していたこと³⁹、内観は大谷本廟を模範とした一方で⁴⁰、外観はネオ・バロックとも形容しうる、在来宗教の本堂建築として奇抜な意匠であることを明らかにした⁴¹。

3-5 二楽荘 1909 (明治42) 年 別邸 鶴飼

主に『二楽荘と大谷探検隊』鶴飼長三郎『各種商店建築圖案集』、『和洋住宅間取実例圖集』、『實費建築中流住宅五十種及材料の計算』、『二楽荘建築工事概要』、伊東忠太「二楽荘の建築」に依拠した。前者から、鶴飼の実務的且つ多様な建築様式を把握した雛形的建築家としての実像を明らかにした。後者から、外観をインド式とした二楽荘が雛形的建築であることを明らかにし、鶴飼と伊東の関与の実際と、二楽荘の意匠に対する伊東の批判的な態度を看取した。故に、鶴飼が二楽荘の実質的な設計者であり、二楽荘は西本願寺の強い主体性のもとに実現した建築であることを検証した⁴²。

3-6 仙台別院 1910 (明治43) 年

主に『仙臺市史』と『教海一瀾』、仙台市歴史民俗資料館所蔵の「御本堂落成慶讃法會記念繪葉書」、『本派本願寺眞宗寫眞寶典』、『佐々木寫眞所』撮影の写真史料に依拠した。

仙台別院は、シンメトリーな構成に丸窓や持ち送りなど、明治建築を抜けきらない特徴を備えている。だが、馬蹄形アーチの窓と葱花線アーチ、三斗と唐破風を平滑に変形したと思しき装飾には、当時流行したアール・ヌーヴォーやゼツェッションの影響も考えうる。殊に、アジャンター石窟寺院に由来すると思われるアーチは、後述する神戸別院・上海別院・築地別院の正面にも通じる。こうした様式的分類はさて

おき、明治末期の時点で西本願寺の別院本堂に、後に「印度佛教式」と称される意匠がみられることを明らかにした。

3-7 鎮西別院 1911 (明治44) 年 頓挫 伊東

主に『教海一瀾』と倉方「伊東忠太の西本願寺関連の計画について」に依拠した。方錐形の高塔の周囲に小塔が起立する本堂の立面は、確かにブッダガヤーの大精舎を彷彿させるが、車輪状の水煙や、蓮弁状の隅飾など、複数の様式的意匠が組み合わさられている⁴³。伊東が設計した大連別院と鎮西別院は、いずれも実現することはなかったが、両者は西洋・インド・日本の要素を折衷している点で共通する⁴⁴。

3-8 伝道院 1912 (明治45) 年 社屋 伊東

主に深見泰孝「仏教系生命保険会社の生成について」、倉方「伊東忠太の西本願寺関連の計画について」、和田秀寿「本願寺伝道院の建築について」に依拠した。大連別院と鎮西別院では実現に至らなかった「印度佛教式」意匠だが、伝道院においては二楽荘と同様に実現している。さらに、その計画には二楽荘と同じく鶴飼が関与していたことを確認した⁴⁵。

3-9 布哇別院 1918 (大正7) 年 Emory & Webb

主に『布哇開教誌要』、『教海一瀾』、『本派本願寺眞宗寫真寶典』に依拠した。左右対称な構成に両翼と中央を強調したネオ・バロック形式の正面だが、左右の両塔は傘蓋、中央奥のドームはストゥーパを彷彿させ⁴⁶、向拝などに用いられている柱は柱礎・柱頭およびエンタシスを有している⁴⁷。当時の内観を示す写真は確認できていないが、「内部は純本山式」とあるため⁴⁸、別院本堂として非常に奇抜な外観を有する反面、内部は在来形式であったと考えられる。

3-10 神戸別院 1930 (昭和5) 年 葛野

主に『INAX REPORT』、『教海一瀾』、『神戸新聞』、『建築と社会』、神戸別院所蔵の図面史料⁴⁹、中村設計提供の写真史料⁵⁰に依拠した。神戸別院の正面アーチは葱花線アーチとも形容しうる。葱花線アーチは後述する翌年竣工の上海別院においても正面上半を占めており、アーチの内側に採光窓を設ける点でも上海別院と共通する。上海別院ではこうした意匠が「印度アジャントラ式」と称され⁵¹、神戸別院の葱花線アーチも同様の由来をもつ可能性がある。さらに、『建築と社会』⁵²と『神戸新聞』⁵³から、神戸別院は上記のアーチや五つの尖塔といった外観のみならず、本堂や内陣においても、「印度佛教式」と評しうる新たな表現を試みたことが窺える。これは、内部においては在来形式を採用したと思われる函館別院、大泊別院、仙台別院、布哇別院とも異なる点である。

3-11 上海別院 1931 (昭和6) 年 岡野

主に白須浄真「旧西本願寺上海別院とその現状」⁵⁴、新たに『満州建築協会雑誌』⁵⁵、『大乘』⁵⁶、『教海一瀾』に依拠した。『満州建築協会雑誌』掲載の外観写真を観察すると⁵⁷、アジャントラ石窟寺院のチャイティヤ⁵⁸窟・ヴィハハラ⁵⁹窟に

散見する葱花線アーチが象徴的である。壁面にはサーンチーの仏塔を圍繞する欄楯を模したと思しき彫刻が存在し、欄楯の支柱に相当する箇所には花卉をもとにした21の円形の装飾が施されている。フリーズには二体の仏像、七頭の像と二本の樹木、多様な鳥類が、写実的に彫刻されている。しかも、同誌には内観写真も掲載されており⁶⁰、ガラス窓、木造架構を思わせる装飾が施された天井、柱頭・柱身に装飾された柱、アーキトレーブの表現にアジャントラ石窟寺院の内部空間との類似性が見出せる。同誌は上海別院の平面図も併載しており⁶¹、内陣・外陣・ガラス窓の位置関係も窺える。

3-12 光徳寺 1932 (昭和7) 年 大林組

主に『近代建築畫譜』、『教海一瀾』、光徳寺所蔵の『光徳寺一件書類』と同寺所蔵の写真史料に依拠した⁶²。特徴的意匠としては、3基の塔屋には葱花線ドームが見られ、玄関の三方、バルコニー中央、3基の塔屋の開口部には、雲形のアーチ、左右の壁面の開口部には、葱花線アーチが確認できる。さらに軒以下の開口部上方と、3基の塔屋の窓ガラスに確認できるアラベスク、バルコニーと軒にみられる波状の曲線が施された持ち送り、欄楯を模したと思しきバルコニーの柵などの建築意匠を、鉄筋コンクリート造で表現したことが、光徳寺が「印度風近世式」と称された所以であろう⁶³。

3-13 築地別院 1934 (昭和9) 年 伊東

主に『築地別院史』、『伊東忠太建築作品』、『建築学者伊東忠太』、新たに『教海一瀾』に依拠した。結果、伊東が築地別院の設計を3案提示していたこと、採用されたのはC案であることが明らかとなった⁶⁴。なお、伊東の述懐には、寺院当事者の干渉があり構想通りにならなかったと述べられている⁶⁵。築地別院は伊東と光瑞の仏寺建築に対する構想が結実したものと言われるが⁶⁶、実際はそうした構想と西本願寺という教団の意向に、齟齬があったことが窺える。

4 意匠の変化と教団の動機

前章で概観した一連の建築を時系列でみると、先ず光尊の時代である明治初期の光尊寺が、その端緒に位置づけられる。次に光瑞が法主となる明治末期、光尊寺から実に約30年を経て、函館別院・大泊別院・仙台別院が建立される。これらの外観は洋風を基調とするが、函館別院と仙台別院の正面細部には「印度佛教式」に通じる意匠を看取した。一方、同時期に伊東が設計した大連別院と鎮西別院は、仏教建築に対する社会の先入観を要因として棄却されたという⁶⁷。この頃、二楽荘と伝道院でインドを主題とした外観が実施されたのは、別邸と社屋という用途の建築が、別院の本堂に比べて意匠的な自由度が高かったためであろう。さて、光瑞辞任後、大正期に建立される布哇別院では、仏跡由来と思しき双塔とドームが実現した。さらに昭和初期には、神戸別院を筆頭に上海別院・光徳寺・築地別院が相次いで建立される。これら

はいずれもドームや塔屋の鐘楼、葱花線アーチなど、建築の骨格をなす部位が、石窟寺院や霊廟建築の意匠を参酌したものであり、明治末期においては正面細部の表現であったのに比べ、より積極的な導入がみられると理解できる。

以上のように、西本願寺の特異な建築様式は、明治初期に和洋折衷の本堂建築として既にその萌芽がみられ、明治末期から昭和初期には様式混淆のなかでも「印度佛教式」と評しうる意匠が外観を装飾し、構成するようになることと云える。

こうした意匠の変化の背後に、2章で瞥見した西本願寺の二大活動と社会状況を見るとき、教団の動機は以下のように解釈できる。近代化に伴い早急に膨大な門徒を獲得する必要に迫られた西本願寺は、国策に追従することで国外にも活路を見出そうとした。アジア開教や大谷探検隊は、教団の苦境を打開すべく展開された二大活動であろう。急激な近代化に深刻な矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの状況のなかであった。その兆しは既に光尊の時代にもみられたが、アジア開教や大谷探検隊が進展するにつれ、「印度佛教式」は、汎アジア的大仏教教団⁸⁾の象徴としての有用性が、教団内で次第に認容されていったと考えられる。すなわち、西本願寺は「印度佛教式」建築を、国内外で迅速に膨大な門徒を獲得するという目的のため、教団の広告塔として建立したと解釈できる。

ここで、旧来の本堂の建築が本山の御影堂の相似形であるのに対し、本研究で取り上げた建築には、厳格な意匠形式が示されていないことに対する考察も述べておきたい。西本願寺は仏教美術などの分野に特化した高度な学識および教義に関する研究の蓄積を有しており、建築に無頓着であったとみなすことはできない。にもかかわらず、3章でみた13の建築に共通するのは、在来仏教の別院本堂として特異であることと、うち11が仏跡的特徴を有することのみである。これを素直に意匠形式の模索とみることもできるが、西本願寺の布教対象が国内外の一般大衆であるならば、国内外で早急に多数の門徒を獲得することを一義的な目的に掲げ、広告塔として衆目を集めることとインドを連想させることを条件に、学識や教義は意図的に封印したとも考えられる。伊東・鶴飼・葛野・岡野・Emory & Webbといった建築家の独自性は、こうした緩やかな制約のもとで初めて発揮されたと言える。

5 結論

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展する

につれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジアの大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で膨大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擲筆することとする。

註

- 1) 藤音得忍「新伽藍の建築過程」『聖地物語』本願寺築別院 1937年 327頁
伊東博士作品集刊行会『伊東忠太建築作品』城南書院 1941年 50頁
岸田日出刀『建築学者伊東忠太』乾元社 1945年 234頁
- 2) 岸田日出刀『建築学者伊東忠太』乾元社 1945年 236-238頁
- 3) 3章を参照のこと
- 4) 4章を参照のこと
- 5) 全上
- 6) 全上
- 7) 嵩崎也「戦前の東・西本願寺のアジア開教」『国際社会文化研究所紀要』第8号 2006年 300頁
- 8) 片山廣雄「大谷探検隊の活動と大谷尊重（光明）・渡邊哲信」『東海大学紀要』第77輯 2002年 155頁
- 9) 全註7 300頁
- 10) 全上 295頁
- 11) 全上 298-299頁
- 12) 白根宗真『大谷探検隊とその時代』勉誠出版 2002年 107頁
- 13) 全上
- 14) 3章を参照のこと
- 15) 4章を参照のこと
- 16) 全上
- 17) 2章を参照のこと
- 18) 3章を参照のこと
- 19) 4章を参照のこと
- 20) 小島勝・三谷典登・藤能成・新田光子・野世英水・赤松徹眞『アジア開教史』（本願寺出版社 2008年 15-16頁
- 21) 全上
- 22) 全上
- 23) 全註7 300頁
- 24) 全上
- 25) 全註8 155-156頁
- 26) 全上 155頁
- 27) 全註12
- 28) 全上 107頁
- 29) 「旧城ヶ口蔵書所(光尊寺)における平面構成と洋風建築対比について」日本建築学会近畿支部研究報告集 1989年5月 897頁
- 30) 「光尊寺(旧城ヶ口蔵書所)の設立経緯と沿革」『光尊寺旧本堂調査報告書』神戸市教育委員会 1989年3月 3-4頁
- 31) 「建物概要」『光尊寺旧本堂調査報告書』神戸市教育委員会 1989年3月 4-7頁
- 32) 倉方俊輔「伊東忠太の西本願寺関連の計画について—明治期の図面をみる伊東忠太の設計活動 その2—」『日本建築学会論文要録』2003年4月 171頁
- 33) 全上 170頁
- 34) 全上 171頁
- 35) 遠藤明久「西本願寺蔵書所跡洋風本堂（明治41年）」『日本建築学会北海道支部研究報告集』第43号 1975年3月 245頁
- 36) 全上
- 37) 越前武「函館・小樽の近代建築」『建築雑誌』第95巻第1160号 1980年2月 26頁
- 38) 全上 172-174頁
- 39) 「權太本派大正別院」『教毎一欄』第448号 1909年1月
- 40) 「權太本派別院の落成」『大正別院の設置』『教毎一欄』第452号 1909年1月
- 41) 全註39
- 42) 長谷川尚人「明治大正昭和前期、西本願寺開創地(御影堂)の二乗柱に於ける鶴飼長三郎の役割—」『建築学研究所卒業論文要録集』九州大学工学部建築学科 2010年 23-1 - 23-4頁
- 43) 全註32
- 44) 全上
- 45) 和田秀寿「本願寺云道院(旧真宗門徒生命保険株式会社社屋)の建築について—伊東忠太(建築設計者)・鶴飼長三郎(建築発命)の書簡・絵葉書からみえる事象—」『東洋史苑』第76号 龍谷大学東洋史学研究会 2010年 43頁
- 46) 今村憲猛『布正開教誌要』本派本願寺布正開教教務文書部 1918年
- 47) 久保富美『本派本願寺真宗宗義要典』日本宗教学会 1916年
- 48) 佐藤藏英談(記者筆記)「布正の教規」『教毎一欄』第556号 1914年2月
- 49) 「神戸新聞」とともに、神戸別院の尾井秀英氏からの提供を受けたことを、篤く銘記する。
- 50) 『INAX REPORT』とともに、中本設計の豊田弘氏からの提供を受けたことを、篤く銘記する。
- 51) 「上海本派本願寺別院新築工事」『満洲建築協会雑誌』第11巻第6号 満洲建築協会 1931年6月 17頁
- 52) 「鉄筋混土のお寺」『建築と社会』日本建築協会 1928年3月 34頁
- 53) 「森嶽仕籠を極めたる一近世式大伽藍の成る 神戸市本派本願寺別院御影堂講堂 廿四より廿八日迄開堂費去要録終了」『神戸新聞』1928年11月 26日
- 54) 本願寺史研究所の大原史代子氏からの提供を受けたことを、篤く銘記する。また、論文に掲載された上海別院の図面史料は、高橋篤夫氏、田中利性氏の立ち会いのもと、2010年8月24日、龍谷大学図書館で閲覧を予定していたが、当該史料が行方不明であり、確認できなかった。いすむにせよ、両氏のご厚意を、篤く銘記する。
- 55) 京都工芸繊維大学の足立沙織氏からの教示を受けたことを、篤く銘記する。
- 56) 本願寺史研究所の大原史代子氏からの提供を受けたことを、篤く銘記する。
- 57) 全註51 口絵2頁
- 58) サンスクリット語。この場合は仏堂を意味する。
- 59) 全上 この場合は僧房を意味する。
- 60) 全註51 口絵4頁
- 61) 全上 口絵5頁
- 62) 光徳寺の森本教理氏、森本嘉代子氏からの提供を受けたことを、篤く銘記する。
- 63) 『近代建築雑誌』近代建築書局刊行会 1936年 486頁
- 64) 「別院別院の樹立會—建築の乾乾離式略々決定—」『教毎一欄』第764号 1930年7月
- 65) 全註2 238頁
- 66) 全上 236-238頁
- 67) 全註32 175頁
- 68) 全註20 29頁